

「脱炭素先行地域・生駒市における カーボンニュートラル実現と歩いていけるまちづくり」

奈良県生駒市 市長 小紫 雅史

奈良県生駒市長の小紫です。いま生駒市では、「歩いていけるまちづくり」ということに力を入れて取り組んでいます。大都市などでは、歩いていける距離に三つほど駅があったりしますが、生駒市は少し大都市から離れた町です。始めに生駒市がどのような町かを解説させていただいたあと、どうして「歩いていけるまちづくり」なのかということをお話ししたいと思います。また本日はウェルビーイングというのがテーマとなっていますので、なぜこのまちづくりがそういうものにつながっていくかということも、ご説明ができればと思います。



奈良県生駒市は、関西、近畿地方の中央に位置し、大阪府、京都府、奈良県のちょうど真ん中にあります。大阪まで20分、京都まで45分、奈良まで20分の場所で、大阪のベッドタウンとして発展してきた郊外都市です。地方創生セミナーなどで、大都市モデル、先進的な技術開発をおこなう工場、山間部のバイオマス発電などの話は皆さんよく聞かれると思います。大都市や中山間地域における地方創生の先進事例は沢山あるのですが、住宅都市の事例については結構少ないのが実状です。住宅都市やベッドタウンは全国に数多くあり、人口もボリュームゾーンを占めています。そこで、このような住宅都市でいろいろな面白い取り組みをしていけば日本は大きく変わっていくだろうと考え、生駒市がそのトップランナーとなって新しいモデルを生み出していこうとしています。職員の採用、まちづくり、福祉、地域共生など幅広く展開していますが、環境も大きな一つのテーマです。

小紫 雅史（こむらさきまさし）
奈良県生駒市長（3期目：奈良県市長会会長）
・新しい職が開き創る若手の会（プロジェクトK元副代表）
・環境員を愛する若手の会代表
・立命館大学「副知」元副代表
・2019年マニフェスト大賞受賞者

1997年3月 一橋大学法学部 卒業
2003年6月 シラキース大学マックスウェルスクール 行政経営大学院修了（行政経営学修士）
1997年4月 環南守（現 環南舎）入社
ハイブリッド自動車に対する税制のグリーン化、ローンやモーターカーとの環境自主協定の締結、レジ袋の有料化、プラスチック製容器包装の3Rなど
2007年3月 外交官として米国ワシントンDCの日本大使館勤務
2011年8月 公募により生駒市副市長に就任
2015年4月 生駒市長に就任（現在3期目）

- ・フレックシブルな事業可能なプロフェッショナル人材の採用、事業支援
- ・自治体独自の「ワーク・ライフ・コメンシイ・セーフティ」によるまちづくり
- ・誰でも歩いていける場所・小規模多機能型コミュニティを数棟する「まちの駅」事業
- ・1棟あたり1.5坪/100㎡の敷地によるSDG&未来都市、地味な投資の環境（政府の脱炭素推進補助金）
- ・ヒアリング・アウトリーチなど、本と並行して進めたまちづくり（2021年にフジテレビで放送、2020年自治体大賞受賞）
- ・まちなかの、脱炭素の「いこま環南舎」、生駒山のランドマークなどの産業振興
- ・市民からの寄付を活用した活動の推進、地域との協働推進
- ・不登校の児童をなくす多様な学びの場、個性を伸ばす教育（2023年に「教育アワード経済産業大臣賞」ほか）

昭和49年3月生まれ（50歳）
兵庫県出身 / 妻・3男1女

「こむらさきまさし」
komuchan2001
「生駒市役所」
Web市長室

私は東日本大震災が起こった年まで環境省におりました。それから約14年間は生駒市という、一番現場や市民と近い場所で働いています。よく地方自治体と一括りで言われますが、あまり私はその言葉が好きではなく、都道府県と市町村は全く性質を異（こと）にしています。国家公務員であった私にとっては、非常にチャレンジングかつスリリングで面白い14年間であったと思っています。私は環境省にいた時から、環境省が環境だけの視点で環境問題を考えることへ違和感を持っていましたので、そのことをいま生駒市のまちづくりへ生かしています。



生駒市の観光資源です。京都大学の山中教授が iPS 細胞を発見されたのは奈良先端科学技術大学院で、生駒市にあります。生駒山からの夜景は多くの外国人の方にも来ていただいております。高山の茶釜(ちゃせん)、日本最古のケーブルカー、宝山寺というお寺もあります。



人口は約12万人で日本の人口の1000分の1という典型的なベッドタウンです。治安は良く、大阪で働く人がとても多いのですが、生駒市に住み続けたいという人が89%もいます。他の住宅都市では概ね50~60%程度であり、生駒市ならではの素晴らしい数字になっています。

今日お話ししたいこと

- I 気候変動の影響と市民の関心
- II 脱炭素×まちづくりの実践！
生駒市版まちのえき

さいごに
まちづくりとウェルビーイング

生駒市のバックグラウンドをご理解いただいた上で、本題に入りたいと思います。気候変動の影響と市民の関心についてです。環境問題の中でごみ問題は生駒市の市民の皆さまも日々目に触れますので大変関心があります。ごみの有料化や

リユース、リサイクルなどへいろいろな反応が返ってきます。一方で脱炭素や気候変動といとなかなか目に見えないので難しさがあります。それでも脱炭素とまちづくりを掛け合わせた取り組みを生駒市がなぜ進めているのか、その具体的な事例である「歩いていけるまちのえき」という取り組みをご紹介します。

気温の上昇

1日平均気温の年間平均(奈良県奈良市)		1日平均気温の月間平均(8月:奈良県奈良市)	
1992年	2022年	1993年	2023年
14.8℃	16.2℃	24.6℃	28.9℃

<気象庁公表データより>

- ・熱中症による健康被害 R3:約600人 R4:約1,000人
- ・エネルギー、電気代高騰 ※奈良県消防救急課報道発表より
- ・食糧価格などの高騰

気候変動の影響と市民の関心について、気象庁が公開する気象データによると、最寄りの奈良県奈良市における平均気温の1992年と2022年を比較すると、1.4度くらい暖かくなっています。さらに8月月間平均気温を見ると、1993年の24.6度から2023年は28.9度となっています。若干差が大きくなる年を比べていますが、20年前の8月は概ね26度くらいで今では28度台になっており、8月の最高気温の平均を見ても2度以上違います。私も子供の頃30度を超えると暑いからプールへ行きたいと言っていたのですが、いまは30度という涼しいという子どもがたくさんいて35度で普通と言っています。明らかに気温は上昇しています。熱中症による健康被害も顕著で、生駒市でも中学生が1人熱中症で亡くなり、救急搬送される人の数も年々増えています。様々な物価高も、気候の影響に起因するところが結構あります。

日常化する異常気象

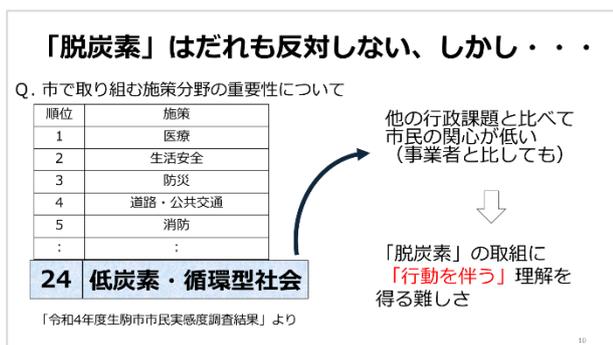
- ・強い勢力のまま台風が上陸するケースや、線状降水帯の発生増加
- ↓
- ・災害対策本部設置や避難指示の回数の増加
- ・倒木による車の損壊事案などの発生



私は環境省におりましたが、環境省時代よりも地方の首長になってからのほうが圧倒的に気候に対するアンテナが高くなっています。なぜかというと、市長は災害対策本部長なのです。

震度 5 弱以上の地震が発生すれば、何があっても市役所に走っていかねばなりません。台風で避難指示、土砂災害、警戒警報が出れば、何を置いても職場に行かなければいけない立場になっています。

生駒市で災害対策本部が立ち上がったのが、私が生駒市に来る前の 10 年間で 1 回だったと聞いていますが、最近は何年 2 回ぐらい災害対策本部が立ち上がっています。私が市長になってからおそらく 7~8 回立ち上がっています。明らかに強い台風が上陸して熱帯のような雨の降り方をします。日本は温帯だと習ったはずですが、ほぼ亜熱帯に近づいているのではないのでしょうか。雨も一度にどかっと降り、明日雨かなと思っても降らなったり、晴れていても急にゲリラ豪雨があたりします。私はタイが好きで結構行っていたのですが、タイの人はいつ雨が降ってくるか分からないので傘を持たないのです。雨が降ったら雨宿りしたらいいという感覚でおられるようで、日本もそれに近い感じになっていくなかと思ったりしています。



これほど影響があり昔より暑くなっていると感じる中で、脱炭素は大切で取り組まなければいけないことはたいていの日本人は理解します。しかしどれぐらい大切かということを知ると、生駒市は毎年アンケートを取っていますが、関心がある上位は医療、防災、福祉などで、低炭素・循環型社会は 24 位と下位になります。脱炭素は誰も反対しませんし、環境問題は大切だといいますが、そのプライオリティは低く、意識を持って何かを実践している方は少ないのが実状です。生駒市は環境意識が高い方が多く、節水、省エネ、プリウスを買ったりする方はおられますが、何か行動を移しておられる方は一部のコア層です。ほかの自治体でもおそらく同じか、もっと低いかもしれません。

このことを前提としてどのように環境問題へ取り組むかを議論しなければ、あまり意味がないと思います。私は環境省出身

ですが、環境省もおそらくこの事をよく分かっておらずプロモーションしているのでは、一市民へは伝わらないと思います。先ほど環境基本計画の中のウェルビーイングの記載があると説明がありましたが、あれはウェルビーイングの一部でしかないと考えており、あのような書き方では国民には響かないだろうと思います。

だからこそ！まちづくり全体で考える！

環境問題をまちづくりに組み込む

市民の関心が高い分野、まちの課題・ニーズと組合せ
(少子高齢化 → 介護予防・健康づくり、買物・食事支援、子育て支援)
 (域外就業・消費が多い → 地産地消による地元企業活性化、地域経済循環の強化)

↓

「結果的に」「知らないうちに」脱炭素になる社会の仕組みづくり
 (環境問題に、環境の顔で取り組んではいけない)

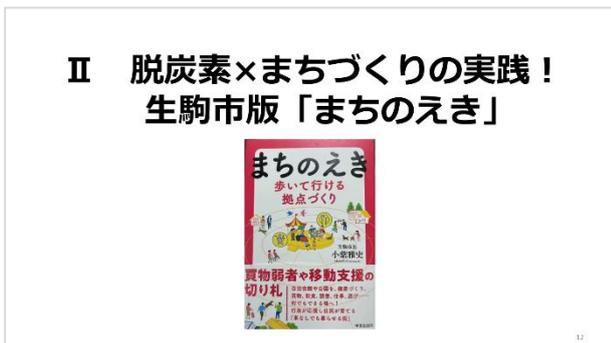
それではどうしなければいけないのか。環境問題とは、まちづくりに組み込んでやらなければいけないというのが結論です。先ほどアンケート結果を示しましたが、圧倒的に市民の関心が高いのは、医療、子育て、福祉、防災です。だからこういったものと組み合わせる。更には、環境の要素や環境の匂いを消して医療や防災の取り組みを行った結果、脱炭素が進む、結果的に脱炭素になっていたという仕組みづくりが必要というのが、生駒市の環境問題への取り組み方です。

もちろん環境が非常に大事だという一部のコア層の方もおられますので、そういう方の取り組みには応援して一緒に取り組んでいます。ただ我々のような住宅都市で CO2 を減らすのは、大きな工場を規制したり、バイオマス発電したりする話でもなく、一番難しいと思います。町で排出される CO2 はほとんど住宅や車から出ますので、市民にご理解いただき、車や冷暖房の使い方の工夫や、EV・省エネ製品の購入、太陽光パネルの取り付けへ協力いただかなければなりません。先ほどの環境問題とは課題解決が目的ではないという話は、とても共感しています。課題解決を目指すのではなく、わくわくする要素を環境対策にどう入れていくか、環境対策という色を消しながら楽しくまちづくりをしていく中で、どのように CO2 を減らしていくのかということ。環境問題を環境の顔をして取り組むと大抵失敗します。

このことは、他のテーマでも同じです。福祉の問題を福祉の顔をして対応すると、大抵失敗します。その典型例が、子ども

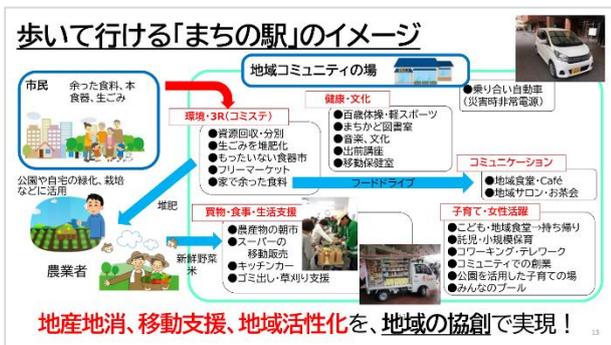
食堂です。誤解のないように言いますと、子ども食堂はとて
いい取り組みです。しかし、「子ども食堂」といってお腹いっば
い食べさせてあげるからお腹が空いている子どもはおいでと
いう福祉の場所にした瞬間、本当にお腹を空かせている子ど
もはその場所に来るかどうか皆さん考えてみてください。そこ
へ行くと、あいつあそこへ行ったぞと言われるのが火を見るより
も明らかです。子どもたちにも、プライドは当然あります。他人
から一方的に施しを受ける場所に子どもたちが行くかという、
たとえお腹を空かせていても日本の子どもは誇りをもってそう
いう場所に行かないと思います。したがって、福祉の問題も福
祉の顔をして取り組んではいけないというのが、基本的な私の
スタンスであり、環境問題も同じだと考えています。

生駒市民 12 万人のうち、1 パーセントくらいが環境コア層だ
と思いますが、その 1200 人が CO2 を削減しても微々たるもの
です。1 万 2000 人や 12 万人全体が少しでも何か行動しても
らう仕掛けを町の中に入れることが脱炭素へ進む、いまそのよ
うなモデルを考えているところです。



II 脱炭素×まちづくりの実践！ 生駒市版「まちのえき」

その一つとしてご紹介するのが、「まちのえき」です。「まちの
えき」とは何かという本を 10 月に出しましたので、ご関心のある
方はぜひお手に取っていただければと思います。



スライドの真ん中あたりに百歳体操というものがあります。地
域コミュニティの場とは、自治会館や公園をイメージしていた

だければと思います。かなり地方へ行くと、自治会館まで行く
のにも車で行かなければいけないところが増えていきますが、
生駒市の場合、おじいちゃん、おばあちゃんの足でもゆっくり
10~15 分くらい歩けば公園や自治会館まで行ける人が 9 割
程度いらっしゃいます。一部そうではない区域もありますが、
ほとんどの人が歩いて行ける場所に、自治会館や公園があり
ます。

いま生駒市は、市民の皆さまがボランティアをやってしてくれ
て、毎週 1 回体操をやって来ています。百歳体操という体
操教室があり、DVD を見ながら、少し重りを持って足を伸ばし
たり肩を上げたり、立ったり座ったりという、生活機能を維持す
るための体操です。非常によくできており、ほぼ全ての自治会
館に体操をおこなう場所があり、週 1 回体操教室をしています。
それぞれ 30 人~50 人くらい集まり、多くの方が運転に不安が
あったり、買い物へ行くのに難儀しているおじいちゃん、おば
あちゃんです。ここへ移動スーパーがやってきますので、とて
も喜んで体操のあとに買って帰ります。農家の方が朝採れた
野菜を持ってきて販売する朝市もあります。また、キッチンカ
ーのようなものが公園に来て、そこでご飯を買って自治会館や
公園で一緒に食べます。最低限の機能を自治会館で賄うとい
うのが「まちのえき」です。

(1) 公共交通・ライドシェアより効果的な移動支援

- <高齢化の現状>
- 平均寿命 : 男性 81.05 歳、女性 87.09 歳
- 高齢者人口 : 3623 万人 (総人口比 29.1% : 過去最高)
- 75 歳以上人口 : 初めて 2000 万人を超え、10 人に 1 人が 80 歳以上
- 高齢者割合 : 世界で最高 (200 の国・地域中)
- 高齢者一人暮らし : S55: 男性 4.3%、女性 11.2% → R2: 男性 15.0%、女性 22.1%

↓ 「暴走老人」公共交通崩壊」報道

「認知症」から「移動支援、買い物・医療難民」へ
「免許は返納したいが、返納したら生きていけない」

⇒ 人生 100 年時代を喜ばない一人暮らし世帯の急増

なぜこのような「まちのえき」を考えたのか、その背景をご説
明します。

一つは、やはり高齢化です。生駒市のようなベッドタウンより、
地方の過疎の町のほうが高齢化率は高いですが、高齢化の
スピードが一番高いのは住宅都市です。高度経済成長時代に
現役世代で入ってきた方の高齢化が、いま進んでいます。
それ自体が大きな課題なのですが、最近では暴走老人や公
共交通崩壊といったニュースが多く出てきています。

私は高齢者の方のサロンや百歳体操をしている自治会館に

よく行きますが、5年前まではおじいちゃん、おばあちゃんに何に困っているか尋ねると、認知症になるのが怖い、介護するのが大変、介護される立場になると迷惑をかけて申し訳ないなど、認知症と介護の話ばかりでした。しかし、池袋で暴走老人による事件が起こり、高齢者が車を運転するのは悪いことのような報道をされました。するとその後は、免許はやはり返したほうがいいと思うが、免許を返したら医者へ行けなくなり、買い物も困る。どうしたらいいのかという話が一気に増加し、移動支援や買い物支援を重点的に行うようになったという経緯です。実際に人生100年時代に近づいています、それをあまり喜べない、不安のほうが大きい人が非常に増えています。

<移動手段の確保の難しさ>

- ・民間バスの支援: 他の行政ニーズとの均衡、バス路線以外の市民の理解
- ・公共交通バス・デマンド交通:
 - 利用者少ない、赤字、バス路線以外の市民の理解
- ・ライドシェア: 事例少ない、タクシーと変わらない料金
- ・その他: 助け合い輸送、グリーンスローモビリティなど

どれも移動支援・買い物難民の切り札にはなっていない

↓

【問いの再構築】
交通手段の多様化と同時に、「歩いて行ける」場所に生活機能、コミュニケーションの場を創る方が効果的ではないか？

移動手段はいろいろ考えられます。民間バスに行政がお金を補填(ほてん)して維持・継続させようという話や、自治体自らバスを走らせる話。生駒市には「たけまるくん」というキャラクターがいますので「たけまるバス」を走らせていますが、あまり乗っていただけない路線もあります。ライドシェアという話や、民間人同士の助け合い輸送、ゴルフカートのようなグリーン・スロー・モビリティなどもあります。ただこれらは乗り物側の支援で、国も自治体も必死に考えており生駒市もやっていますが、これらはどれも切り札にはなかなか得ません。

もちろん出来ることは行いましたが、これをしたから先ほどの問題が全て解決するはずはありません。バス路線は市内全てを隈なく走っているわけではありませんし、バスといっても1時間に1本くらいしか走らずやはり非常に不便です。あつたら乗るので、乗るからバスを走らせてと言った人が全くバスを使わないというのは、地方自治体でよくある話なのです。

この問題に対しては、問いのデザインを再構築するという言い方をしますが、おじいちゃんバス走らせてくれと言うのですが、バス走らせることが彼らの望みではありません。彼らが出かける1番目のニーズはお買い物、2番目が医療、3番目

が趣味や友だちと会うことですので、この3点にどのように対応できるかということです。これは、乗り物に乗せてどこかへ運ぶというよりは、歩いて行ける場所ですれらが満たされれば、彼らのニーズに応えることになるだろう。交通手段をどうするかではなく、歩いて行ける場所にいろいろな機能を付けることを考えたほうが、少なくとも住宅都市の生駒では10分歩けば最寄りの自治会館や公園があるので、そのほうが効果的なのではないかということで始めたものです。それは、全国のベッドタウンでもだいたい同じことが言えるのではないかと思います。

(2)核家族化を補う地域での子育ての場

<少子化の現状>

- ・出生数 : 770747人(2022年・前年比40863人減;過去最少)
- ・合計特殊出生率 : 1.26(前年は1.30;過去最低) ⇒ さらに減少見込み
- ・予定・理想の子どもの数: 「1人以下」は6.6%、実際は27.3%
- ・予定・理想と現実の乖離の理由
 - ◆「子育てや教育にお金がかかりすぎるから(52.6%)」
 - ◆「これ以上、育児の心理的、肉体的負担に耐えられないから(23.0%)」
- ・他方、核家族化、共働き世帯増加など、家族の子育て機能の低下

↓

現代社会において、子育て世帯の負担軽減には、子育て世代同士がつながる場、世帯だけでなく「地域で育児」できる場・機会が不可欠

2番目が子育てです。核家族化がどんどん進んでしまい、私も4人目の子どもが生まれた時はコロナ禍で、育児休暇を取りました。しかし1日中子どもと1対1でいると、これは「孤育て」といいますが、本当にしんどいです。どこかに出かけられる場所、地域での子育てや、場合によっては介護などをしてもらえれば、お昼の時間だけでも少し中抜けすると、朝と晩であれば頑張れるかもしれない。昼も含めて1日中頑張らなければならない状況では、どこかで心が折れると、ほぼ全ての親御さんが言っています。お昼ご飯だけでも子どもと外に食べに行くなど地域の方とお話して、1日中大人としゃべる時がなかった日が続かないようにするために、地域で子育てするための場所を地域で確保するというのが必要になってきているということです。それが二つ目の背景です。

(3)活用されていない自治会館、公園

- ・自治会加入率: 78.0%(H22)⇒71.7%(R2)
- ・高齢者の利用に偏る自治会館
- ・利用規制・制限だらけで活用できない公園の増加

↓

- ・住民ニーズに応える価値を生み、多様な世代が集まる自治会館
- ・住民主体の多様な活用が実現する公園

⇒ 「歩いて行ける」場所にある資産を最大限活かす！

三つ目が、活用されていない自治会館、公園の問題です。自治会館については、生駒市は結構活用されているほうだと思います。公園は、これもメディアによく出ていましたが「～したらいけない」というルールが増えて、何もできない公園がいろいろな都市で結構増えてきています。いま生駒市において、公共施設の中で一番活用されていないのは明らかに公園であり、公園でいろいろなことをやりましょうという取り組みをしています。例えば公園でキャンプをしたり、バーベキューをしたり、ストライダーという子どもの小さな自転車ですがそのレースをやったり、焼き芋をやったりなど、公園というのは基本的に自由に使っているものなのだとことを市民に知ってもらう取り組みをしています。我々の近くには、歩いて行ける場所に大切な自治会館や公園などの財産がある。これらの背景を全部ひっくるめて、それらの財産をフル活用することが重要ではないかということで、「歩いて行けるまちのえき」をやっていました。

(1)まちのスポーツジム(運動する)



「まちのえき」では何をやっているのか、具体的な取り組み事例をご紹介したいと思います。まず、スポーツジムです。そもそも先程お話した百歳体操からスタートしたものです。だいたい自治会館に30人くらい集まり行っています。生駒市は健康寿命や寿命が非常に長い町なので、この百歳体操が市内100カ所ほぼ全ての自治会館にあることと、必ず関係があると思っています。右側がモルックというフィンランド発祥のスポーツです。頭も使うし体も使います。科学的にも頭を使いながら体を使うことは、どちらかだけやるよりも非常に効果が大きいという話があります。またこれは高齢者だけではなく、障がいのある方も子どもたちも一緒にできて、子どもたちが大人に教えたりするような光景も結構あります。こういう体を動かす健康づくりの機能が、自治会館や公園を使えば比較的簡単にできます。

(2)まちのショッピングセンター(買う)



二つ目が買い物です。このニーズが一番大きいのですが、左にあるようなスーパーの移動販売車が百歳体操の終わる時間になると自治会館の前にやってきます。体操が終わった人たちが、いまあれが切れていた、飲みものがなくなったなど手軽に利用され、お弁当をここで買って帰る人もいます。こんな小さな軽トラに400種類の商品が乗るとのことで、非常に喜ばれています。山の中腹の集落などに行くと、おじいちゃんおばあちゃんが拝みながら待ってくれたりして、いま買い物にとっても苦労している人がたくさんおられることが分かります。

右側は、青空市(あおぞらいち)です。朝採れた野菜を農家さんがここに持ってきます。白菜などは、本当に採れる時に一気に採れてしまうので、農家の方は知り合いに配りまくってタダでいただいたりしますが、それでも配りきれなく畑で腐っていたりします。それを青空市へ持ってきて飛ぶように売れると、農家の方も買った方もハッピーになります。もちろん時々デパートに行きたいなどありますが、最低限の買い物は歩いて行ける場所でできるようになっています。

(2)まちのショッピングセンター(買う)

<背景>

- ・買い物支援が必要な市民の増加
- ・多様な販売方法への転換を模索する事業者

<概要>

- ・400種類の商品を扱う移動スーパー
- ・地元農家の朝どれ野菜販売
- ・出張駄菓子屋
- ・大手小売事業者の実証事業(赤ちゃん本舗、花王ほか)

- ⇒ 近くで買える(高齢者の移動支援、子育て世帯の負担軽減)
- ⇒ 野菜などが安い、フードロス対策など

ご紹介になりますが、大手小売事業者の実証事業として利用いただいています。アカチャンホンポさんなどは、概ね郊外の車でしか行けない場所に大きな店舗を持っておられますが、そのモデルがこれからも有効であり続けるのかという話があり、このような小さな拠点へ子どもたちのお母さん、お父さんを集

めて小規模多機能の販売拠点について検討されています。駅前が一番便利な所に店を構えれば、おじいちゃんおばあちゃんが来るだろうと思っていたら駅まで歩くのも難しくなり、おじいちゃんたちが歩いて行ける場所に店を出すという実験的な事をいましてれています。

子育て世代は車の運転ができると思うかもしれませんが、子どもを車の後ろに乗せて買い物に行くと、店に着いたら子どもが寝ていることがよくあり、起こせずにそのまま家に帰ったりすることもあるのです。そうであれば、ストローラー(ベビーカー)で公園まで行きそこでお買い物する場所があるというのは、子育て世代にとっても意味のあることだと思います。

(3)まちな食堂・喫茶店(食べる)



次は食べるという機能です。これはキッチンカーの写真です。朝のモーニングカフェのようなことをやっている場所もあります。割合的にはおばちゃんが多いですが、近くで採れた野菜で200円~300円のカフェをやってれています。右側に1人暮らしの高齢者の男性が映っています。特に男の方の1人暮らしは、統計学上相当な割合で低栄養状態です。栄養失調まではいきませんが、買いに行くのも自分で作るのも面倒で、1日1食しか食べない低栄養の方が多いのです。それは健康や寿命に明らかにマイナスの因子になりますので、とにかく食べていただく場所を増やしていこうというのが一つです。

もう一つ左にあるようなキッチンカーは、いま女性の方などを中心に、創業や起業をする際の大きな選択肢の一つになっています。女性の創業支援などという意味でも、高齢者の方の低栄養の脱却という意味でも、こういうキッチンカーのような食べる場所が、百歳体操が終わったあとに公園にいる状況ができれば、いろいろな意味を持つかなと思っています。

(4)まちな図書館(読む)



次は、まちな図書館です。生駒市は結構図書館が多いので、比較的便利ははずなのですが、それでも図書館まで歩いて行けない、借りたら持って帰るのが重く、途中で2回くらい休憩して家に帰ったなどの声が結構あります。いま、なるべく小さな拠点、自治会館などへ本棚を作り、このような図書館を作るのがすごくいい取り組みかなと思っています。また、コロナの時に断捨離がとてはやりました。家のものを片付けたい時に、本もそのまま捨ててしまう人も多かったのですが、子どもたちが大きくなって読まなくなった絵本や小学生が読むような本・マンガをここに持ってきてくれれば、子育て世代がお昼にきて読み聞かせしたり、少し一息ついたり、あるいは子どもをおじいちゃんおばあちゃんが面倒を見てくれる間にゆっくり好きな本を読んだりすることができます。そして家もすぐ片付きます。

生駒市は住宅都市で、空き家問題も先進的に取り組んでいますが、空き家になる一番の理由は、物があふれていることです。私も父親を8月に亡くしましたが、父親の家は物であふれていましたので、なかなか売りに出せません。このまちな図書館は、断捨離の問題にもすごく効いて空き家問題にもつながっており、家にある食器なども持ってきてもらっています。うちの家もそうですが、高齢者2人だけで住んでいるのに、食器棚に10セットくらい食器が並んでいる家はおそらくたくさんあると思います。たいてい1セットか2セットあればいいという話かと思っていますので、余ったものを持ってきて若い世代へ安価で、あるいはタダで譲っていただいたり、何なら子どもたちがメルカリで売ってその収益の一部は子どもたちがとり、残りはまちづくりのお金へ寄付していただくこともできます。

そうすると、本当にいろいろな人に役割があって、かつ断捨離や空き家対策にもなり、本を介したコミュニケーションが自治体間で生まれたりします。マンガでもよく、我々の世代が読ん

でいたドラゴンボールやスラムダンクなどがここへ並ぶと、いまの子どもたちも面白いからやはり読むのです。そうすると、おっちゃんと子どもたちとの間にコミュニケーションが生まれたりするなどの効果も期待できます。

もう一つ言うと、この本棚を作る、いわゆる DIY 作業です。高齢者の男性は、地域コミュニティの中へ引き込むのがとても難しい人が多いです。女性は比較的すんなり入ってくるのですが、男性の方は、先ほど言ったように、ここへ来たらご飯が食べられるよ、体操できるよ、健康づくりできるよと誘っても、こういう場所へは出てこないのです。

ではどうすればいいかという、役割を与えて汗をかいてもらうことです。おじいちゃんへ、本棚を自治会館に置きたいのだが、若い者はこういう作業は苦手で、是非作っていただきたいとお願いすると、仕方ないと言いながらうれしそうに本棚を作っていただけなのです。そうすると、自分が役に立つことができ、自治会や町へ貢献できたという実感を持つことができ、作っていただいたお礼にお茶やご飯をお勧めすると、応じていただけるようになります。先ほどの子ども食堂と同じです。施しを受けるだけの場所へはとても行きにくいものですが、何か役割を持ってもらえば、人は来てもらえます。そういう意味でも、この図書館はとても意味があるのです。

(8)まちの農場(耕す、栽培する)



町には耕作放棄地もたくさんあるので、そこへまちの農場としています。ここへも高齢者の男性が来てくれます。物を作ったり、見て分かるものが生まれたり、育てたりするのは、高齢者の男性は好きです。また農業へは子どもたちも大勢来てくれますので、おっちゃんたちがすごく頑張ります。ドラム缶を切ってバーベキュー台を作ったり、ドラム缶に穴を開けてピザ窯を作ったり、それを1個1000円くらいで売り出そうという方もいたり、すごく盛り上がってやってくれています。農場はとてもいい場所になっています。

(10)まちの保健室・病院(診る・癒す)



まちの保健室・病院も行っています。健康測定で骨密度を測るのがいつも人気ですね。

(11)まちの保育園(育てる)

<背景>

- ・子どもを育てやすい国だと感じる日本人は61.1%(他国より低い)
- ・「地域で子育てを助けてもらえるから」「社会全体に理解があるから」と答えた人も減少

<概要>

- ・育児相談
- ・子育て世帯間の子育てシェア
- ・地域での一時預かり、「家庭的保育事業」



⇒ 子育て世帯の負担軽減、子どもの多様な学び、地域の活性化

(12)まちのオフィス(働く)

<背景>

- ・企業のテレワークOK:51.2%、×:37.7%
- ・自宅83.7%、シェアオフィス約10%
- 「家族に気兼ね」「職場以外の人との交流や人脈」「買い物と合わせて利用」「自宅にこもらないよう」など

<概要>

- ・「まちのオフィス」は、自治会館の空き室利用したシェアオフィス
- 近い、安い、子ども連れOK

⇒ 現役世代と地域との接点、現役世代にも地域活動にもプラス



現在はまだ例はありませんが、法に基づき子ども3人から預かる保育ができますので、将来は「まちのえき」にまちの保育園を作りたいと思います。またテレワークの施設を自治会館の2階に設けて、まちのオフィスを展開しています。

(13)まちの避難所・交番(守る)



最後、避難所の話を少ししておきます。これも同じような話で、いま学校などが指定避難所になっています。我々の世代であれば全く問題と感ぜないのですが、学校は自治会館よりも数が少ないため、高齢者の方が歩いて学校まで行くのは無理だ、車椅子の方が行くのは無理だという人がどんどん増えており、自治会館に避難させてほしいという声が増えてきました。家に居ればいいのではとも思いますが、1人暮らしで雨や風が強い時に家にいるのが怖いので、自治会館に避難させてという話が結構あります。

そういうことで、例えば自治会館に太陽光パネルを貼って、EV(電気自動車)を自治会で買って会館につないでおけば、停電があっても電気がつく拠点になります。北海道で大きな地震があり全島停電した際に、EVがある家だけ電気が光って町の希望の灯火になったという話がありますが、自治会館がそういう場所になるように太陽光パネルやEVを自治会館に付ける自治体の応援をしています。そうするとCO₂も減ります。いま全く環境の話はしていませんが、少しずつCO₂は減っています。

- ・一人ひとりが買い物や食事等に車で出かけるのではなく、歩いて行ける場所で生活機能や楽しみの場がある
- ・地産地消の野菜を食べることによるCO₂削減
- ・みんなと一緒に冷暖房「Cool & Warm Spot」←人が集まる仕掛け
- ・自治会館に太陽光発電
- ・青パト&ライドシェア用のEV
- ・本や子ども用品、食料のリユース(おすそ分け・シェア)

環境自体を目的にしてもうまくいかない！
地域を楽しみ、地産地消を進めれば、環境は良くなり、SDGsは具体化
⇒ 楽しく人が集まる場所を作れば地域課題は自然に解決する！

最後に、どうして脱炭素につながるのかということをお話します。例えば一人一人が車に乗ってスーパーに買い物に行く、ご飯を食べにいくよりも、歩いて行ける場所にスーパーの車が1台だけ来て物を売るほうがCO₂は減ります。微々たるものかもしれませんが、これが積み重なっていけば非常に大きな差が出てきます。遠くの場所からくるスーパーの野菜も悪くないのですが、地元で採れた朝の新鮮な野菜が「まちのえき」で買えて、安くて新鮮で美味しい、しかもCO₂が少なく、カーボンフットプリントが非常に低い、そういう野菜が食べられるのです。私は子どもが4人いますが、地元のおっちゃんに野菜をいつもいただいているおかげで野菜が好きな子どもにも育ちました。

あと環境省がクールスポットなどをよくやっています。家で一

人一人が冷房を使うより、図書館などへみんなが集まって冷房を使ったほうがCO₂は減ると言っているのですが、環境のためだけにクールスポットに集まろうという人は誰もいません。まちのえき、生駒市の自治会館のような楽しく面白い場所をつくれれば、自然にみんなが集まるのです。そこにエアコンを効かせておけば、家で1台1台エアコンをつけるよりもCO₂が減るし、みんなが楽しいです。

生駒市は夏休みの8月20日ぐらいに子どもたちへ、夏休みの宿題終わってないだろうからみんな集まれといって、大学生や地域の教員OB、OGに協力いただき、夏休み宿題合宿をやるのです。そうすると子どもたちは、宿題まだ終わってないと言いながらノートやドリルなど持ってきて、大抵は勉強しないで遊んでいます。そういった集まる場所を設けています。何か面白い集まるきっかけがあれば人は集まるし、自然にCO₂は減るのですが、CO₂を減らそう、だからみんな集まってという呼びかけ方だとよくいきません。

先ほどお話ししたように、自治会館に太陽光発電を付けるのは、CO₂削減のためではなく防災のためにやっているのです。防災のほうが市民の関心が圧倒的に高いからです。能登半島の地震があり、南海トラフの警戒情報が初めて出て、防災への意識が高まっている時に、自治会館に太陽光付けよう、家にEVを買おう、補助金も出るよと言うと、EVを買うだけではなく家の電気系統につなげようとなります。費用は高くなりますが、そういうのを補助したりします。はっきり言うと、避難所に避難できる人はすごく減っています。そのため自宅避難を前提に考えないといけないのですが、その時にCO₂も減らすということではなく、防災のためにEVを買って家とつないでおくことで、3日くらいは電気がついてという家が出来上がります。

そういう話をすると、太陽光発電を付けてみる、補助金は？という話になっていきます。環境にいいから太陽光発電を付けてと言った瞬間に、この家あと何年住むかわからないなどと言って断られます。そのあたりの現場のリアル感を環境省が理解して、我々もそこを理解してうまく説明していくことが大切です。環境自体を目的にしてもうまくいかないのが、地域を楽しみ、地産地消を進めれば環境は良くなります。結果として環境も良くなるし、SDGsを進めていけます。今日もSDGsのバッジを付けておられる方がたくさんおられますが、SDGs推進室のようなものを作ったあとに何をやるかと順番を付けて進めている会

社はないですか。バッジを付けて具体的なことを何もしていない会社は格好悪いので、組織をつくる前に何をするか先に考えたほうが良いと思います。生駒市の SDGs は何ですかというと、「まちのえき」が一番大きな取り組みとなります。

ウェルビーイングを実現する、 生駒市の「地域共生社会」のコンセプト

「誰一人取り残さない」=「誰一人お客様にしない」

⇒すべての人が役割を持つ

- 地域活動に汗をかいた人の方が幸福度、満足度が高い
(生駒市市民実感度調査の結果)
- 役割を持つことで、人を頼ることへの抵抗感が減少
(地域に入れない高齢者男性への工夫)
- 自尊心を傷つけることなく、必要な人を支援できる
(こども食堂の功罪)

47

最後はウェルビーイングの話です。先ほど子ども食堂の話などをしましたが、生駒市は 10 月 12 日に地域共生社会推進全国サミットを、村木厚子さんなど全国からいろいろな方をお招きして開催しました。コミュニティデザイン、まさにコミュニティというのはデザインが必要で、人が集まる、とにかく楽しい場所をつくることを行いました。先ほども申しましたが、課題解決だけ言っている場所に人は来ません。マイナスをゼロにするしかない地域には集まりません。0 から 1 を目指して何か面白いことをやろうという場所に人は集まります。

もう一つは、SDGs で誰一人取り残さないなど言っていますが、僕はあまり好きではありません。誰が取り残さないのか、誰が頑張るのかといったとき、行政が頑張って誰一人取り残さないといけなといった顔で誰一人取り残さないと言っている学者さんや事業者の方などいらっしやると、何を言っているの？と思います。

誰一人取り残さないためには、どの市民もお客さまにしてはいけないのです。どの市民にも、人を支えるという要素、役割が絶対にあるのです。正確には、誰一人 100 パーセントのお客さまにしてしまわないということです。本当に重い障がいがあって、人の役に立つなどということはなかなかできない人もいます。ただし、彼がそこにいるだけで、地域に果たしている役割というのは確実にあります。私も自閉症の子供が 1 人いますが、彼も腹の立つことも言いますし、面倒くさいことも多いのですが、彼がいてくれたから私が学んだこと、家族が学んだこともたくさんあります。地域の人もプラスになっている、そういう要素もゼロではありません。

高齢者の方へも、先ほど言ったように、一緒にご飯食べよ、低栄養だから、などと言っても来ません。「本棚を作って」、「戦争の話を教えて、子どもが聞きたいと言っている」というふうに、あなたは求められている、役割があるという話をします。つまり、市民が市民を助ける、一人一人が必ず何かの役割を持つ、そのようなコミュニティのデザインを僕たちがどう描けるかというのが、地方自治体の腕の見せ所でもあり、地域の力、市民の力だと思います。

実際、地域活動に汗をかいたほうが、市が何かとお世話を焼いて市役所に何かやってほしいと言っている自治体よりも、明らかに幸福度、満足度、そして定住意向率が高いのです。生駒市は、約 9 割の人が死ぬまで生駒市にいたいと言っていますが、それは、生駒市が人使いの荒い町だからです。皆さんに、何かやってください、生駒市のこと好きで生駒愛(いこまあい)を言うのであれば、その愛を行動に変えてくれといつも言っています。何か得意なこと、特技があるでしょう、将棋が強い、料理ができる、パソコンが得意、ではそれをやって何か役に立ってくださいと言いつづけています。

それが生駒市のビジョンです。市民に汗をかかせるまちづくりをずっとやってきています。自民党総裁選、立憲民主党の代表戦、そして衆議院選挙がありました。あなたは汗をかいてください、国民の皆さん汗をかいてください、そんなフレーズを 1 回でも聞いたことがあるでしょうか。メディアがそんな話を切り取って放送しなかったというもあるかもしれませんが。ただ地方創生といった話はほとんどなかったし、一人一人が役割を持つ何か地域で頑張れと話をする政治家、政治家候補の人は、僕が知る限り 1 人もいません。そんな日本になってしまっていると私は思っています。汗をかいた人のほうが絶対にその町に残りますし、定住もしますし、満足度も高いというのが、生駒市の調査から明らかになっていますので、そういうまちづくりをしていきたいと思います。

先ほど、おじいちゃんの話をしました。役割を持つことで、人から助けをもらうことへの抵抗感が減少します。応援や支援を受け入れる力というので受援力という言葉があります。高齢男性はこの力が低いですが、この受援力を高めるためには何か役割を持ってもらうことが大切です。自尊心を傷つけることなく必要な人を支援する、本当に助けたい子どもに子ども食堂に来てもらうためには、子ども食堂でカレーが食べられますとい

った打ち出しをしてはいけません。最後に答え合わせをしますが、どうしたらいいでしょうか。子ども食堂という言葉はイメージが付いてしまっているからもう使いません。生駒市では「みんなの食堂」という言い方をします。子どもが来ても、カレーを食べさせません。まず人参を切らせませす。玉ねぎを切らせませす。おじいちゃん、おばあちゃんが来たら 300 円をもらって受付をしよう、配膳・下膳を手伝ってもらったあと、よく頑張ったね、ではご褒美にカレーをみんなで食べよう、好きなだけ食べていいよと言います。

また、みんなの食堂には、家庭に問題がある子だけでなく、問題を抱えていない子も来ています。ですから、困っている子なのか困っていない子なのか、はた目から見たらまったく分からないデザインにしています。でもそうしないと、お腹を空かせていて家でご飯を出してもらえない子どもは来にくいのです。来てみて、しかも施しをいきなり受けるのではなく、人参を切るなど何か役割を持って役に立ったからこそ、みじめな思いをせずカレーをおなかいっぱい食べて家に帰ることができるのです。そういうデザインが必要ではないかと思いますが、生駒市はそういうふうなデザインでまちづくりをやっているということです。長くなりましたが、ご清聴ありがとうございました。

(終了)